

19世紀のラテンアメリカ

- 1) ラテンアメリカでは、1804年から25年までの間に、カリブ海を除くほとんどの地域が独立した。ブラジルを除き、多くの国で共和政が採用され、奴隷解放など社会改革が行われたが、実際にはクリオーリョの大土地所有者や地域ボスなど少数の有力者による寡頭政治であり、極端な貧富の差があり、政情は不安定であった。チリとブラジル以外の国では、独立戦争で力をつけた軍事的指導者、カウディーリョたちの抗争が続いた。
- 2) 19世紀後半は、No.137の「ラテンアメリカの近代化」を参照せよ。

19世紀末のラテンアメリカ

- 1) 欧米諸国における第二次産業革命の進展に伴って、原料・食料の対欧米輸出がいつそう増加した。具体的には【1: 】(ブラジル)・【2: 】(キューバ)・当時は火薬の重要な原料であった【3: 】(チリ)などである。背景には、陸上での大量輸送を可能にした鉄道、それに潮流・季節風に左右されない大量輸送手段である汽船の普及がある。
- 2) アルゼンチンの牛肉が大量にヨーロッパに輸出されるようになったことは特筆に値する。この輸出は赤道を越えることから、食肉は干し肉か塩蔵肉で行われてきた。1870年代にフランスで発明された【4: 】は、1880年にイギリスで実用化され、1882年にはアルゼンチンで最初の冷凍肉工場が建設された。この冷凍業部門にイギリスやアメリカ資本が進出、それが19世紀末以降の冷凍肉輸出を急増させ、牧畜業の発展を支える主要因となった。20世紀初めには、アルゼンチン産冷凍牛肉の輸出先は大半がイギリスであった。南米ではイギリスの、中米ではアメリカ合衆国の影響はいつそう大きくなった。

《蛇足》現在では冷凍装置を装備したコンテナを積載する方式に移行。なお、20世紀後半以降、日本のマグロ延縄(はえなわ)漁船は氷点下70度の船内冷凍庫で巨大な遠洋マグロを丸ごと急速冷凍するようになった。それは数年も品質を保ち、日本は世界中の海からマグロを集める国になった。同様に船内で超低温冷凍されたサケ・マスは寄生虫卵が死滅し生食可能となる。

シモン=ボリバルもびっくり

「中南米会議を引き継いだ」とよく言われるが……

アメリカ合衆国は、1889年、第1回【5: 】をワシントンで開催した。大統領はベンジャミン=ハリソンである。「アメリカ大陸の諸問題について討議する国際会議」であり、シモン=ボリバルが呼びかけた「1826年のパナマ会議」に始まる十数回の中南米会議を引き継ぐ」とされるが、実際はアメリカ合衆国主導の中南米外交の場であり、これ以降アメリカ合衆国はラテンアメリカへの影響力強化を本格的に追求し始めた。No.137の「II ラテンアメリカ諸国の独立」を参照せよ。

アメリカ合衆国のラテンアメリカ政策(20世紀初頭)

フロンティア消滅(1890年頃)後のアメリカ合衆国の政策転換全般についてはNo.141を参照せよ。

【6: 】大統領(共和党、任1901-09)は国内的には【7: 】政策を推進して、独占資本を適切に規制したが、中米諸国に対しては武力行使を伴う【8: 】を断行した。これを【9: 】※1とも言う。1913年就任の【10: 】大統領(民主党 任1913-21)も呼び名は異なるが、革新主義を継承。ラテンアメリカ諸国への影響力拡大に努めた。

※1 マッキンリーの副大統領だった時代の演説(1901)で「言葉は穏やかに、ただし大きな棍棒を持ち運んでいけば、成功できる」と西アフリカの諺を引用したのが由来。有名な風刺画にも描かれた。カリブ海諸国が自国の政府を維持出来ないならば米国が関与するという強い意志を表明したのも。

- 1) ドミニカ、ニカラグア、ハイチ(ハイティ)に対する支配力強化! 海兵隊の派遣や対外債務の肩がわり。
 - ①ドミニカ スペイン領(1500)、仏領(1795)、スペイン領(1814)を経て、1905年、アメリカの保護国とする。
 - ②ニカラグア アメリカの干渉を受け続ける。

20世紀のことであるが、1979年、ソモサ独裁政権をサンディニスタ民族解放戦線(FSLN)が打倒するも、1980年代にアメリカが介入、内戦状態に。1990年、親米派政権成立。
 - ③ハイチ ラテンアメリカ最初の独立国にして最初の黒人共和国として独立(1804)したが、サトウキビ栽培による土地(ハイティ) の消耗などで農業が行き詰まり、アメリカの干渉を受ける。このほか、メキシコへの経済進出を行った。
- 2) 運河(パナマ)地峡を手に入れ、カリブ海地域の支配をめざす。これも「棍棒外交」の時期である。

1903年 アメリカは、パナマをコロンビアから独立させ、運河地帯を租借し、工事権を得た。

1904年 【11: 】着工

1914年 パナマ運河完成 アメリカは管理権を握る(ウィルソン大統領)

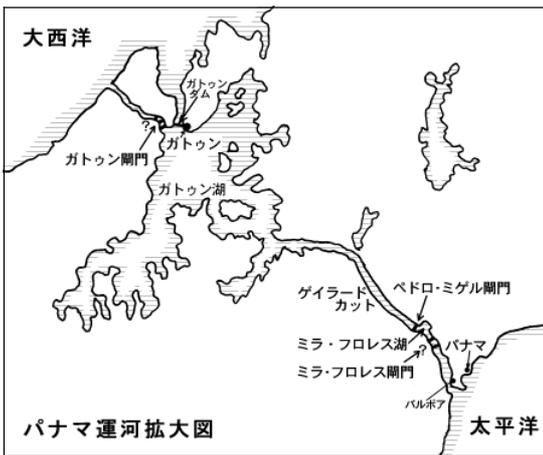
1989年 アメリカ軍、パナマ侵攻。※2

1999年 パナマ運河、パナマに返還される。

※2 20世紀末の出来事であるが、パナマの独裁者ノリエガ将軍が国策として行っているコカイン密輸を根絶する名目で、ブッシュ米大統領は1989年12月20日突如、米軍2万4千名をパナマに侵攻させ、ノリエガの率いるパナマ国家防衛軍との間で激しい戦闘を行い首都パナマシティを占領、翌1990年1月、ノリエガは米軍に投降した。しかし、ノリエガの国家統制が外れた結果、コカイン密輸量は倍増したとも言う。



3) **これがパナマ運河だ!** 大西洋・太平洋をつなぐので東西というイメージに反し、ほぼ南北に斜断している。



総延長約80km、通航所要時間約9時間。ガトゥン湖の水面は海拔26m。1534年、スペインのカルロス1世(=ハプスブルク王朝のカール5世)が調査を指示したことがあるが断念。スエズ運河の設計者レセップスがパナマ地峡に運河の建設を計画し、フランスの主導で1880年1月1日に着工したが、黄熱病の蔓延や技術的問題と資金調達の両面で難航、1889年に断念した。この後は前掲記事の通り。

水平式のスエズ運河と異なり、パナマ運河は閘門式と呼ばれ、船をロック(閘門)で仕切られたチャンバー(閘門室)に入れ、チャンバー内の水面を上下させ、階段状に船を海拔26mのガトゥン湖まで上昇させ、また下降させる。パナマ運河を通航できるのは、チャンバーに収まる長さ900フィート(約274m)以内、幅106フィート(約32m)以内の船舶に限られる。船艦ミズーリは東京湾内で日本の降伏文書調印に使われ、ミサイルを装備して再就役、1991年には湾岸戦争に参加。映画『バトルシップ』(2012年、アメリカ)にも「出演」してエイリアンと戦ったが、この船艦ミズーリも「パナマックス」サイズで通航可能である。戦艦大和は幅が幅38.9mもあり、は絶対に通れない。

ベニート=フアレス (1806-72)

- 1) ベニート=【12: 】は、19世紀のメキシコ史を語る上で不可欠の人物。進歩的なレフォルマ(改革者)であり、民主主義とインディオの平等な権利を導入し、ローマ・カトリック教会の政治への影響力を減少させた。
- 2) 貧しいインディオである両親を早くに亡くし、苦学して弁護士、1842年には裁判官になった。オアハカ州知事(任1847-53)を務めたが、有力者の腐敗に反対して逮捕、投獄。釈放後アメリカ合衆国に最初の亡命。
- 3) 1855年に帰国、反政府の自由党「liberales」に参加。法務大臣に任命され、軍人や僧侶の特権廃止法案を提出するが保守層の反発に会い、ローマ教皇ピウス9世に破門される。1857年に保守勢力の蜂起で内戦が勃発。1858年、混乱の中で臨時政府の大統領に選出されたが、首都が陥落し、アメリカ合衆国に再度亡命。
- 4) 1860年、アメリカ合衆国の支援を受け帰国、翌1861年、内戦に勝利してメキシコシティに入り3月の大統領選で当選すると、対外債務支払い拒否宣言を行った(任1861-63)。1861年10月、イギリス、スペイン、フランスが【13: 】を決定、1862年にメキシコに侵入。イギリス、スペインはフアレスの債務返済に関する提案を了承し撤退を始めるが、フランス軍は、翌1863年の6月にメキシコシティを占領。フアレスは抵抗活動を続けた。ナポレオン3世の要請でハプスブルク家のマキシミリアン大公が1864年4月に【14: 】としてメキシコ帝国の皇帝に即位。フアレスに恩赦と首相就任を提示したが、フアレスは帝政と傀儡政権を拒絶し、アメリカ合衆国の援助の下で徹底抗戦し、プロイセンの強大化で緊張が高まったこともあり、1867年3月、ついにフランス軍は撤退。マキシミリアン1世は忠誠を誓った8,000人のメキシコ人帝国軍と共に戦い、5月に敗れて逮捕された。著名人の助命嘆願があったが、フアレスは大勢のメキシコ人が彼との戦いで戦死した観点から減刑を拒み、マキシミリアン1世は6月9日に銃殺された。《この項はNo.133の7)⑤を参照せよ》
- 5) フアレスは1867年7月に共和政復活を宣言し、12月の選挙でディアスを破り大統領に再選された。1872年、フアレスは執務中に心臓発作を起こし、波瀾万丈の生涯を閉じた。

《蛇足》ベニート・ムソリーニは社会主義者である父親によって、フアレスにちなんで命名された。

メキシコ革命 1910~17年 ラテンアメリカ最初の本格的な**民主主義革命**

- 1) フアレスと対照的なのは独裁者ポルフィリオ=【15: 】(1830-1915)である。フアレスの下で陸軍士官として数々の戦いで重要な勝利を勝ち取った。1867年の大統領選挙でフアレスに敗れた。フアレスの死後、暴力と情報操作的な手法で三度大統領になり(1876、1877-80、1884-1911)、30年以上にわたりメキシコの独裁者であり続けた。
- 2) ディアスは産業に新技術を導入し、国外からの投資を歓迎した。またメキシコシティへの工場の建設を促進した。これらの政策は都市の無産階級の増加と外国(主にアメリカ)資本の流入に帰着した。こうして彼の時代にメキシコは大規模に外資が導入され、鉄道、港湾、通信網などのインフラ整備・新たな銀行の設立・商業の活発化・工業や農牧業が拡大し、経済発展を遂げた。だが、無原則な外資導入により主要産業は全て外国資本の配下に置かれ、経済発展の恩恵に浴したのはいくらかの特権階級だけで、労働者や農民は逆に貧しくなっていた。そこへアメリカの1907年恐慌がメキシコに影響し、社会にはディアスへの不満が高まっていく。こうしたディアス独裁に反対する運動としてメキシコ革命が始まる。
- 3) 1910年の大統領選には自由主義者フランシスコ=【16: 】が反ディアス勢力を結集し立候補するが、選挙の直前にマデロは反乱煽動の罪で逮捕、収監される。6月の大統領選挙では獄中のマデロに対する投票はわずか196票であった。投票は操作されていた。9月にディアスは大統領就任、10月にマデロは恩赦で釈放され、亡命先のアメリカから武装蜂起を呼びかけた。11月になると各地で蜂起が起こり、その流れはメキシコ革命となった。アメリカ(ウィルソン大統領)は様々な局面で非公式に介入、状況を操作しようとしたが効果はなかった。翌1911年の5月にディアスは大統領を辞任。ついにディアス独裁政権は打倒された。同年5月、マデロは大統領に就任。しかし、マデロは土地改革に否定的で【17: 】らの農民勢力と対立。政権は不安定だった。
- 4) 1913年、マデロは自派のウエルタ将軍のクーデタで失脚、暗殺された。ウエルタ政権は、【18: 】(ブルジョワ派)とも農民派とも対立し政権は不安定だった。農民派の指導者は【19: 】、バンチョ=ビリヤ(またはビリヤ)である。1917年、カランサは大統領に就任。サパタらの影響を受けた将軍たちが民主的な憲法を制定した(土地改革、地下資源の国有化、政教分離、社会的権利の保障)。この憲法は他のラテンアメリカ諸国にも大きな影響を与えた。これを持ってメキシコ革命の終期とする。1919年、農民軍指導者サパタがカランサ派に暗殺され、改革は不徹底に終わった。その後サパタの思想を引き継いだのがサパティスタ民族解放軍である。

《蛇足》現在、サパティスタ民族解放軍はインターネットを活用した非暴力対話路線に転換している。「真の司令官は人民である」との立場から司令官であっても副司令官を名乗る。日本のSEALDs(自由と民主主義のための学生緊急行動 2015.5~2016.8)の創設メンバーがそれぞれ副司令官を名乗りあったのはこれに影響されたと言われている。